

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 M.A.ニマル・カルナーラトナ
論文題目 Foreignism and Colloquialism in the Development of the Sinhalese Literary Language
論文審査委員 糟谷 啓介教授、イ・ヨンスク教授、中井 亜佐子准教授

1. 本論文の構成

スリランカで話されるシンハラ語は、古代以来、パーリ語、サンスクリット語、タミル語、さらに植民地時代にはポルトガル語、オランダ語、英語などの外来言語との接触にさらされてきた。その結果、話しことばとは異なる語彙と語法を備えた書きことばが発展した。本論文は、シンハラ語が外来語法と口語用法にいかに対応してきたかという視点から、古代より現代までにいたるシンハラ語の文章語形成の歴史を論じたものである。論文全体は、謝辞3頁、目次その他7頁、本文184頁、付録6頁、参考文献16頁から成る。提出論文は英語で書かれているが、以下の報告では日本語の訳語を用いる。本論文の構成は以下の通りである。

目次

第1章 序説

- 1.1 シンハラ文学の誕生
- 1.2 言語と文学
- 1.3 シンハラ文学の展開
- 1.4 近代における歴史的・社会的背景
- 1.5 シンハラ語への翻訳及び翻案
- 1.6 近代シンハラ語の進歩的傾向
- 1.7 公用語としてのシンハラ語

第2章 初期の発展と中世シンハラ語

- 2.1 シンハラ語の起源
- 2.2 シンハラ語の史的展開
- 2.3 中世シンハラ語
- 2.4 タミル語の影響
- 2.5 サンスクリット語の影響

第3章 混合シンハラ語文体と純粹シンハラ語文体

- 3.1 混合シンハラ語文体
- 3.2 ポロンナルワ時代のシンハラ語
- 3.3 シンハラ語における文の成立
- 3.4 エル（ヘル）シンハラ語文体（純粹シンハラ語文体）
- 3.5 古典期における言語の安定傾向

第4章 散文体とその簡素化

- 4.1 近代シンハラ語
- 4.2 ダンバデニ時代におけるシンハラ語の主要特徴
- 4.3 クルネーガラ時代のシンハラ語
- 4.4 ガンボラ時代のシンハラ語
- 4.5 コーッテ時代のシンハラ語

第5章 西洋言語の影響

- 5.1 言語復興運動
- 5.2 ヨーロッパ諸言語のシンハラ語に対する影響
- 5.3 英語の影響
- 5.4 近現代シンハラ語における純化運動
- 5.5 シンハラ語の文章語及び標準語

第6章 近現代シンハラ語文学

- 6.1 論争、批評、口語用法
- 6.2 近現代シンハラ語フィクション
- 6.3 近現代シンハラ語小説の発生過程
- 6.4 現代シンハラ語における進歩的傾向
- 6.5 20世紀後半の文章語
- 6.6 現代散文文学の主要特徴

資料

参考文献

2. 本論文の概要

第1章では、シンハラ語の言語学的記述とシンハラ語の歴史的流れが簡潔に整理されるとともに、本論文が基づく概念、用語法、時代区分、史料の性質、分析方法が示される。

第2章では、シンハラ語の成立から中世シンハラ語までが論じられる。シンハラ語最古の史料が見出される紀元前3世紀から紀元4世紀までは、「シンハラ・プラークリット語」と名づけられるが、史料の乏しさからその正確な姿はわからないところが多い（「プラークリット」は、古代インドにおける土着の俗語を意味する）。4世紀以降、シンハラ語は上座部仏教の聖典の言語であるパーリ語の影響のもとに変化し、8世紀には現在見られるようなシンハラ文字が成立した。こうして中世シンハラ語には、パーリ語の語彙が大量に入りこむこととなった。11世紀のインド・チョーラ朝の侵略とともに、ヒンドゥー教とタミル語が入ってきた。ヒンドゥー教の聖典言語であるサンスクリット語が中世シンハラ語に大きな影響をおよぼし、サンスクリット語の語彙をそのままシンハラ語の文のなかで使うまでになった。

第3章では、こうしてスリランカに入ってきたサンスクリット語の強い影響のもとで、12世紀に混合シンハラ語文体が成立したことが論じられる。この文体では、シンハラ文字でサンスクリット語が書かれ、サンスクリット語の発音、複合語、修辞法が、シンハラ語で使われることになった。事実、この時期の碑文には、単語の三分の二がサンスクリット語であるような例も見られる。こうした混合シンハラ語では、9世紀のインドの修辞家ヴァーマナによって確立された修辞法である「賛辞」の形式が好んで用いられ、そこに見られる装飾と定型句への執着は、王権の誇示の表現ともなった。その一方、12世紀には、シンハラ語古来の語彙だけを用いる純粹シンハラ語文体が生まれたが、後世に引き継がれることはなかった。

第4章では、13世紀から16世紀までのシンハラ語散文体の変遷が論じられる。この時期に特徴的なことは、上述した混合シンハラ語文体の簡素化の傾向である。13世紀には、サンスクリット語の単語がシンハラ語の文法に合わせて採り入れられるようになり、その結果、大量のサンスクリット語語彙がシンハラ語化していった。表現の面ではそれ以前の装飾過多の傾向が薄れるとともに文体の表現性が増し、個々の作家や作品に応じて多彩な文体が採用されるようになった。時には当時の話しことばを反映したと思われる文体で書かれた作品さえある。14世紀半ばから15世紀初頭にかけてのガンポラ時代には、政治権力の弱体化により教育機関が荒廃したため、文学は一時凋落した。その後のコーッテ時代には、強力な統一王朝のもとで、簡素化された混合シンハラ語が社会に根付くこととなった。純粹シンハラ語の聖域であった韻文においても、混合シンハラ語が用いられたことは、この傾向をよく表している。

第5章では、植民地支配下におけるポルトガル語、オランダ語、英語の影響が論じられる。ポルトガルは1505年から1658年まで、オランダは1658年から1796年まで、イギリスは1796年から1948年までスリランカを支配下においた。ポルトガルとオランダの支配はキリスト教の伝道を重視したため、仏教にもとづく教育研究施設の荒廃をもたらした。それによってサンスクリット語とパーリ語の教育がほとんどなくなり、混合シンハラ語文体も使われなくなった。その代

わりに、西洋語の影響を受けた口語に近い文体が、公文書でも用いられるようになった。さらに、イギリスの支配下のもとで近代的学校教育制度が整備され、1815年に英語がスリランカの公用語となると、英語が社会のすみずみまで浸透した。ただし英語の影響は書きことばには及ばず、話しことばに限られていた。

こうした植民地支配に対して、18世紀にはサラナンカラ、20世紀にはクマーラトゥンガによる言語復興運動が起こった。サラナンカラは、言語の復興が仏教と芸術の復興に必要な手段であると考え、12世紀の混合シンハラ語文体こそが言語の理想の姿であると主張した。クマーラトゥンガはより極端な立場をとり、12世紀の純粹シンハラ語を理想ととらえ、シンハラ語からあらゆる外来の要素を排除しようとした。「ヘラ・ハウラ」と呼ばれる言語運動の指導者であったクマーラトゥンガは、反植民地主義的言語ナショナリズムの急先鋒となり、独立後のシンハラ語公用語化運動にまでも影響をおよぼした。

第6章では、近現代シンハラ文学における口語文体の形成をめぐる問題が、時代順に整理されて論じられる。言語復興運動は、西洋語との接触によって生まれた口語用法への反発が原動力であった。たとえば、19世紀の聖書翻訳に用いられた文体は、シンハラ語話者には不自然で滑稽なものに映ったが、にもかかわらず、その後の口語文体を促進した側面もある。19世紀に口語文体を形成する源となったのは、新聞・雑誌などの定期刊行物に掲載された「論争」という形式の記事——実際に行われた論争の口述筆記も含む——であり、英語で書かれた数々の作品——英文学には限らない——からの翻訳であった。20世紀に入ると、シンハラ語による小説作品が書かれるようになるが、そこで用いられた表現媒体はさまざまなものがあつた。伝統的な混合シンハラ語を用いる作家もいれば、地の文は混合シンハラ語、会話部分は口語文体という使い分けを行った作家もいるというように、20世紀前半は混合シンハラ語と口語用法が併用された時代である。このような状態に決着をつけたのが、マーティン・ウィクラマシンの小説『変わりゆく村』（1944）である。ウィクラマシンは、小説技法としてのリアリズムを追及するとともに、表現面では洗練されながらも自然な口語文体を確立することに大きく貢献した。独立後のシンハラ文学においては、話しことばをそのまま小説の文体として採用する動きや、日常会話における英語の語彙を小説の文体に取り込む試みなどが行われた。

結論では、本論文を通して得られた知見が三つの論点——シンハラ語散文体の発展過程、外来言語の受容の多様性、口語文体の成立過程——に整理され、総括される。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下の点にある。

第一に、シンハラ語史全体を通して、パーリ語、サンスクリット語、タミル語、ポルトガル語、オランダ語、英語といった諸言語の語法がシンハラ語の発展に及ぼした影響を正確に跡づけたこ

とである。このような巨視的な叙述は、相当な学識と構想力がなければ不可能であるが、著者の力量はそうした要件にしっかりと応えている。なかでも、スリランカの政治・社会・文化の状況に応じて、外来語法がそのつど異なる性格を帯びていることを論じた部分は、重要な指摘を多く含んでいる。たとえば、サンスクリット語の影響に関しては、大乘仏教の教育研究施設アバヤギリヤの役割、上座部仏教徒による護教論的な大乘仏教研究、11世紀のインド・チョーラ朝の侵略によるヒンドゥー教の流入、王権の威光を背景としたサンスクリット語文献の受容など、複雑な過程があったことが示される。その結果、12世紀にはサンスクリット語の要素をそのまま採り入れた混合シンハラ語文体が成立し、後世のシンハラ語文体の規範となった。それに対して、英語を初めとする植民地宗主国の言語は、古典的規範に守られた書きことばよりは、話しことばに多く影響を及ぼしたことに特色がある。とくに英語は、近代教育施設を通して社会のあらゆる側面に浸透し、1815年にはスリランカの公用語となった。また、英語の文学作品がシンハラ語に多く訳され、その文体はシンハラ語の口語文体の確立に一定の寄与をもたらした。このように、シンハラ語における外来語法の影響が複雑で多層的なものであることを示した点が、本論文の第一の大きな成果である。

第二に、外来語法と口語用法という二つの軸を交差させることによって、シンハラ語における言語純化主義の特徴や口語文体の成立の問題を、歴史的なパースペクティブのなかで究明した点があげられる。言語純化主義の極端な形態は、20世紀初頭の「ヘラ・ハウラ」運動に見られる。ヘラ・ハウラが目指したのは、パーリ語、サンスクリット語から英語に到るまでの外来要素をすべて捨て去り、12世紀の純粋シンハラ語に回帰することであった。土着性と純粋性を強調したヘラ・ハウラは、反植民主義的な言語ナショナリズムの運動と見なすことができ、社会的に大きな影響を及ぼしたが、そこで生まれた表現は、日常言語から離反した擬古的文体でしかなかった。シンハラ語における口語文体は、こうしたヘラ・ハウラの復古的純化主義から距離をとることによって初めて生まれえた。このように、本論文では、シンハラ語の書きことばの領域で強力な古典的規範がはたらいっていたために、口語文体の確立までには多くの紆余曲折があったことが、明快な叙述で描かれている。このような言語ナショナリズム、言語純化主義、口語文体をめぐる問題は、他の国々との事例を比較することによって、さらに豊かな成果を生み出すことができるはずである。

しかし、本論文にも以下のような問題点が見られる。

第一に、シンハラ語史の全体をカバーする枠組みを用いたために、個々の時代の歴史的・社会的背景の分析には不十分な面が見られる。もちろん、あまり視野を広げすぎると、論文の分析枠組を崩すことになることは十分に理解できるが、たとえば、英語がどのような教育政策、教育機関を通して普及浸透していったかという問題に関しては、より具体的な記述が望まれる。

第二に、シンハラ語の語彙のレベルにおける英語の影響が詳細に論じられているのに比べて、統辞法、文体、レトリックのレベルでの影響があまり論じられていない。もしそれがなされていれば、英語からの翻訳がシンハラ語の口語文体の成立にあてた影響を、より具体的に論じるこ

とができただけである。たとえば、英語版『ラーマーヤナ』がシンハラ語に翻訳され、後の口語文体に影響したことなどは、オリエンタリズムとコロニアリズムの問題を視野に入れるなら、興味深い論点を提供するはずである。

しかし、これらの問題点は著者自身もよく認識しており、本論文の優れた内容を損なうものではない。本論文は、ここで明らかにされた成果だけでなく、さらに豊かな成果をもたらさうる鉱脈を数多く蔵している点からも、高く評価することができる。著者にはそれを可能にするだけの学問的力が十分に備わっているだけに、本論文を基礎にして研究を一層発展させることを期待せずにはいられない。

4. 結論

平成 18 年 1 月 19 日、学位請求論文提出者 マッラワ・アーラッチゲー・ニマル・カルナーラトナ氏の論文および関連分野について本学学位規則第 8 条第 1 項に定める最終試験を行なった。本試験において、審査員が提出論文 「Foreignism and Colloquialism in the Development of the Sinhalese Literary Language」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、カルナーラトナ氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、カルナーラトナ氏が一橋大学博士（学術）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。

平成 18（2006）年 2 月 8 日

最終試験委員

糟谷啓介

イ・ヨンスク

中井亜佐子